

こまつ座公演「兄おとうと」を見て

8月20日、新宿紀伊国屋サザンシアターで「兄おとうと」を見る機会がありました。観劇に招待してくれたのは息子の妻で、毎年、夏休みの楽しいイベントとして、こまつ座の公演をプレゼントしてくれるのです。本当に嬉しいプレゼントです。

これまでも何度か井上ひさしの作品を見てきました。彼の、憲法を守りたい、平和を作りたい、庶民のつましい生活を応援したい、言葉の面白さを存分に楽しみたいというような思いが伝わる芝居を見せてもらってきました。井上ひさしは「**むずかしいことを やさしく、やさしいことを ふかく、ふかいことを ゆかいに、ゆかいなことを まじめにかくこと**」と、自戒の言葉にしています。



実在の人物、東京帝大教授の政治学者・吉野作造(1878年—1933年)と、その弟高級官僚の信次、それぞれの妻が姉妹同士という二組の夫婦を軸に、思想の対立と兄弟の相克を描いていました。

兄は「政治は国民を基とする」という民本主義の主張をします。大日本帝国憲法下の当時、大正デモクラシーの指導的立場に立った人物です。国とは何か、ということが、彼のテーマなのです。



吉野作造

政治、国家、憲法という言葉は、難しく感じます。でも国民とは我々のことであり、とても大事な、自分のことなのです。貧しい人々はなぜ貧しいままなのだ？と苦しみます。困っている人々は助けてほしいと願います。どうしたらいいの？と誰でも、素朴な疑問を持ちます。その素朴な問いに答えていくとき、答えが見つかると、井上ひさしは、登場人物に、楽しく、歌って、踊って、しゃべりまくらせるのです。



一方、兄と劣らず秀才の10歳下の弟信次は「寄らば大樹」と信じ、最も堅い仕事、役人になり、国家主義、官僚主義にたって法を守ろうとします。国とはもちろん、天皇のもとに、国益を守り、法の秩序を守り、国民はそれに忠実に従うべきものと考えています。この二人は会えば口論、言い合いになり、対決してしまうのです。



吉野信次

日清戦争(1894-5)、日露戦争(1904-5)と日本は戦争によって、外国に侵略、利権を拡大し、軍備拡張をしていきます。中国大陸は混乱し、日本は貧しいがゆえに他国への侵略が国策となっていく、資本主義が生まれ、ある程度、人権意識が芽生えてきた時代だったでしょう。けれども世の中は、貧しい人々で溢れかえり、法を守っているのは、生きていけず、何とか生き延びようと庶民は死に物狂いの日々を送っています。

吉野作造は、国とは「一つのおにぎり」に似ていると、貧しい人々や、また、コチコチ頭の役人の弟に説くのです。民族、思想、宗教、人種、地域、文化、ましてや天皇を中心としてまとまるものが国ではない。ささやかな食べ物であるおにぎりが形よく、丸く、また三角にまとまっているように、「みんながいっしょに食べておいしいと喜びあう人々のまとまり」が国だと教えるのです。日常生活をユーモアの目で見直し、国を自分のものとするのです。

貧しい庶民、面白い警官、右翼、中国人、泥棒達もみんなユーモラスに歌って踊ります。兄と弟の思想、生き方の対立の中であって、和解、とりなしの立場に立つのが、姉妹同士であるそれぞれの妻たちです。愛情と思いやり、愛嬌と度胸、やり繰りしても気風がよい、夫を操縦しつつ上手に立てる、という賢い妻を持った吉野兄弟は幸せです。そして清楚な美しさが魅力の剣 幸が素敵でした。さすが元宝塚のトップです。



剣 幸

見事な舞台でしたが、直前にランチを楽しんだせいか、ピアノ伴奏が心地よいBGMになって、前半にはパッチリお目々でいることができず、別の夢見心地でいたことも白状します。